THE FOUR HUNDRED
ザ・400
フォーハンドレッド
スティーヴン・シェパード 高見 浩／訳

400

スティーヴン・シェパード
高見　浩　訳

海外ベストセラー・シリーズ

角川書店

ザ・400（フォーハンドレッド）

1981年9月30日　初版発行

著者／スティーヴン・シェパード　訳者／高見 浩　発行者／角川春樹
発行所／株式会社角川書店　東京都千代田区富士見2—13—3
TEL　東京265-7111（大代表）　〒102　振替　東京3-195208

落丁・乱丁本はお取替えいたします　多田印刷／大口製本

0397-791120-0946(0)

ザ・400

フォーハンドレッド

THE FOUR HUNDRED

by

Stephen Sheppard

Copyright © Stephen Sheppard 1979

Japanese translation rights arranged with

Ed Victor Ltd., through Japan UNI Agency, Inc.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

目次

一八七二年　冬　七
一八七二年　春　六一
一八七二年　夏　一二三
一八七二年　秋　一六九
一八七二年　冬　二三三
一八七三年　冬　二五九
一八七三年　春　三三九
訳者あとがき　四二九

ウィンキーと〝真珠採り〟たちに——

子供心にも家庭生活は楽しかった。が、受けた教育となると、ごく初歩的な段階に留まった。私はほとんど徒手空拳で、人生という戦場に送りだされたのだ。初陣に際してはだれしも恐怖ですくみあがるということすらわきまえずに、兄と私はこの世に一歩踏みだした。父も母も俗世には欲がなく、信仰の世界に生きていた——天国にいけば、約束された憩いと黄金の街路がこの世の労苦に対する慰藉を与えてくれると信じているがごとくに。だが、われわれは少年の常で、両親の言葉など耳もかさなかった——来世の門を敲く前に、この世の楽しみを少しでもきわめたかったのである。現世において、選ばれた少数者のみに許された楽園を守護している連中は、だれかに入場を許す前に、まずそいつの富と力と地位を問う。少なくとも自分はこの世に選ばれた少数の一人だと信じ、この世の楽園はもはや幻ではなく確実に己れのものなのだと確信して、かの白磁の柱廊をくぐれる者、その数は世界広しといえども四百を越えまい。

南ブルックリンのデルグロー通りを飛びだしてからの道程は長かった。が、貧困と、青春の燃えあがる野望は、命の瀬戸際に立つまで萎えることのない不屈の闘志を植えつけるもの。われわれもまた、そういう〝度胸〟に欠けはしない——兄のジョージと私はそう確信し、いつの日か——いかなる犠牲を払っても——〝四百〟の楽園の門に入ろうと決意した。

オースティン・バイロン・ビドウェル

主要登場人物

ジョージ・ビドウェル（別名ウィルスン）　詐欺師、計画の主謀者
オースティン・ビドウェル（別名ウォーレン／ホートン）　ジョージの弟
ジョージ・マクドナルド（通称マック）　手形偽造のプロ
エドウィン・ノイエス（別名ヒルズ）　ビドウェル兄弟の仲間
メイ　酒場の女給、マックの愛人
エリザベス　伯爵夫人、オースティンの愛人
エレン　ジョージの愛人
フランシス大佐　イングランド銀行総裁
フェンウィック　イングランド銀行副総裁
スタントン　コンチネンタル銀行頭取
グリーン　サヴィル・ロウの仕立屋
ウィリアムズ　仕立屋の徒弟
ロバート・ピンカートン　私立探偵

一八七二年　冬

ジョージ

シカゴ発ノーフォーク行の列車は、オハイオ州の原野を南東に向かってひた走っていた。時速約四十マイル。巨大な四―四―〇型蒸気機関車は、黒煙と煤を吐きだしつつ、前照燈の光で闇を切り裂きながら、横なぐりに吹きつける雪をものともせずに驀進していた。

客車の窓から外を見すかしている男の目には、凍てつくような夜景しか映らず、それも吹雪でかすんでいた。雪片の貼りつくガラス越しにながめていると、とても将来の明るい見通しなど湧いてこない。

ジョージ・ビドウェルは、吐息でくもった窓ガラスを両手でぬぐった。歪んだ自分の顔がひときわ鮮明に映った。車内のオイル・ランプの放つ朧ろな光に照らされたその顔には、およそ生色がない。こけた頬をくまどる黒い翳が、青白い肌と短い黒髪をくっきりと浮かびあがらせていた。ふと思いだし笑いをした拍子に、彫りの深い眼窩に沈んだ瞳が、きらりと光った。

「いくら外を見たって、だれも助けにきてくれるやつはいねえやな」お馴染みの声が言った。

ジョージは窓から向き直った。

「吹雪いているオハイオの野っ原があるだけよ」

ジョージ・ビドウェルは、微かな笑みを浮かべながら両手を膝にもどした。第一の問題はこの手錠だ――手首を締めつけている鋼鉄の感触を味わいながら、彼は思った。次がこのペンダーだな。向かい側に坐っている屈強な男は、無表情な眼差しでひたとジョージを見すえている。ペンダーは自分の職務に忠実だった。分厚い毛皮の外套に光っているバッジを誇りに思っているのだろう。ショットガンの二連の銃口がゆっくり上向いたと思うと、ジョージの鼻の下で止まって口ひげに触れた。ペンダーは冷たく笑った。きっと安っぽい西部小説の保安官でも気どっているのだろう、とジョージは思った。

「わが家にご帰還てわけだな、え」

ジョージにとって〝わが家〟とは、ウェスト・ヴァージニアのウィーリング監獄で、さらに二年――あるいは三年――服役することを意味する。脱獄するまでそこで過ごし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

た二年間の記憶は、シカゴで三か月暮らしたあいだにきれいに薄れかけていたのだが。こんど再び脱獄を試みたとしても、まず成功を期すことはできまい。三か月前のあの晩にしてからが、脱獄を図った七人のうち、五人までは運動場を横切ることができなかったのだ。

ジョージが再び車窓に向き直ると、ペンダーはショットガンを下ろして、固い板張りの椅子にふんぞり返った。そもそも、ジョージのケチのつきはじめは、ノーフォークでつかまったことだった——南軍の兵士の生き残りたちをカモにしてやるつもりが、まんまと裏目にでてしまったのである。ノーフォークに着いて一週間もたたないうちに、まるで謀られたように逮捕されてしまった。いまから二年以上も前のことだ。が、三か月前に脱獄したとき、幸運の女神は彼に微笑みはじめたかに見えた。彼はシカゴまで逃げのびた——ところが、そこでせっかくの運も尽きてしまった。ジョージはあらゆる角度から自分のとった行動に検討を加えた。その結果、そもそも南部にいったことからして失敗だったのだという結論にすでに達していた。彼の生まれ故郷はニューヨークだった。そこならまず安全だった。警察をはじめとして、然るべき筋にいろいろな知り合いがいたからである。彼は口元をぐっと引き締めた。つかのま視線が、自分をウェスト・ヴァージニアまで護送する任務を担っている、鈍重な元南軍兵士の顔に漂った。ジョージが北部でこしらえた金は、南部ではろくに利用する間もなかった。そこではだれもが北部人に対する復讐欲に燃えていた。生粋のヤンキーであるジョージに対する手配状が出まわってしまうと、もはやお手上げだったのだ——少なくとも平時においては。これが内戦中だったら、おそらく事情は変わっていたに相違ない。

ジョージは窓外の闇をじっと見つめた。といって、目に映るのは過去のイメージばかりだった——さまざまな人、場所、そして失策。シカゴに逃げた彼は、わき目もふらずに〝隠れ家〟に急いだのだった。友人の整版工がすでに当局の監視下にあることなど、どうして彼に予知できただろう？

長い客車の端の急ごしらえのテーブルを囲んでいた連中が、ペンダーの背後でどっと歓声をあげた——車内には他の乗客や婦人なども乗り合わせているのに、彼らはやれくそったれのどうのと聞くに耐えない悪態をがなりたてている。ペンダーの頭に、人前での礼儀という意識が朧ろげながら甦った。あからさまに不快な表情を見せている婦人たちをながめてから、彼は部下の保安官助手たちに自分の威

厳を示すのはこのときとばかり、彼らのほうを向いてどやしつけた。

「ルーク、ジェイク、イライシャ、ここは豚小屋じゃねえんだぞ。ちったあ口を慎しめ――わかったか？」

ルークがペンダーに見えるように、自分のカードを広げてみせた。エースが四枚に、二が一枚。

「羨ましかねえか、保安官？」

三人の助手はいっせいに笑い声をあげた。ジェイクが片手をのろのろとふった。

「おい、ペンダー、こっちにきてゲームに入れや」

またしても男たちの間から、笑声が湧き起こった――粗野で、知性のかけらもない、かん高い笑い声。それは、戦闘の最中に初めて耳にして以来記憶の底にしみついた南軍兵士の間のびした話し声を、ジョージに想起させた。あれはいつだっただろう？　南北戦争が終わってから、ほんとうにもう十年もたったのだろうか？　北軍に入隊したとき、ジョージはまだほんの青二才だった。彼は無表情に、いささかの郷愁も覚えずに、窓外の冷たい闇の奥を見すかした。いま突然思いだしたあの頃の自分が、彼は嫌いだった。あの頃の彼は、向こうっ気ばかり強く、自信過剰で、情に流されやすい青臭い若者だった。あれは別の時代の別の人間だったのだ。窓外をじっとながめていると、雪片がガラスに叩きつけられては風に乗って、冷たい闇の中に吹き流されてゆく。ジョージの視線はまたしても木の窓枠に、逃れようのない現実にもどった。ジョージ・ビドウェルにとって、屍衣に蔽われた黒い大地は神秘的でもなんでもなかった。彼自身そこに立ったことがあったから、よく覚えていた。あれは、そう、戦争の末期、勝利の混乱のさなかだった。いまではそれが別世界の出来事のように思われた。

じっさい、南北戦争は世の中を一変させたのである。一八六五年四月九日、北部ヴァージニア軍の致命的な敗北の後、勝ち誇る義勇軍の准将は、敗軍の将ロバート・E・リーから軍旗を受けとった。兵士たちは彼らの若き金髪の司令官に歓呼の声を送り、その歴史的な光景に立ち会えたことに誇りを抱いた。開戦時からその瞬間まで生き延びた、彼らの中の少数の幸運な兵士たちにとって、それはまさしく長い血みどろの戦争だった。屈服した敵から軍旗を受け取るジョージ・アームストロング・カスターに対して、オハイオ生まれの彼らが高らかに感激の歓呼を浴びせたのも無理はなかろう。その折りに撮られた記念写真を見ると、いちばん左端に立ったジョージ・ビドウェルは、戦友たちと共に真剣そのものの顔で未来を見つめている。

「ちょっとでも妙な真似をしてみろ、その尻を吹っ飛ばしてやるぜ――いいな？」

ジョージはびくっとして周囲を見まわし、次いで向かい側の男に目をやった。ペンダーはすでに立ちあがっていた。石のように無表情な顔で、念を押すようにショットガンを突きつけてくる。ジョージは軽くうなずいて、相手を安心させた。ペンダーはちらっと肩越しに、テーブルのほうをふり返った。そこでは二度目のゲームのカードが配られたらしく、列車の轟音にも負けないくらいの歓声が三人の保安官助手の間からあがっている。

「ようし、おれも入れてくれ」ペンダーは声をかけた。

ジョージにとって、それは黄金の言葉にも等しかった。再度ちらっと彼を見やると、ペンダーはショットガンを手に仲間たちのほうに歩いていった。ジョージ・ビドウェルは、内心にんまりとほくそ笑んだ。冷たいガラス越しに夜の闇に見とれているふりをしながら、その実彼は、押し上げ式の窓の下端にあるプッシュ式の二つの掛け金を、七時間三十六分にわたってさりげなく観察していたのである。

南部出身の四人の法の番人たちは、それまで数日間にわたって、彼らの囚人をさんざんだしにして楽しんでいたのだった。再逮捕された脱獄犯を引き渡されるや、あらゆる機会をとらえて彼を嬲りものにした。からかうにはもってこいの〝紳士〟を護送しながら、格好の慰みものにしてのけた。腕のいい床屋で調髪した髪はたちまち短く刈られ、趣味のいい仕立ての服は刑務所支給の粗末な囚人服に変えられた。が、実のところ、ジョージは本物の紳士ではなかった。そう見えるように、自分で努力したにすぎない。彼が生まれ育ったのは、ニューヨーク市のサウス・ブルックリンだった。貧窮にあえぐ周囲の環境が、生き抜く道はただ一つ、のしあがることだ、と彼に教えた。そこでの生活は、彼に鋭い頭脳と機知を与え、経験が金の力を教えた。やがて彼は金を効果的に使い、楽しむ術を身につけたのだった。

ジョージは保安官たちのほうをちらっと一瞥した。彼らはみな、最初に配られたカードに全神経を集中している。もしジョージが殺人犯かなにかだったら、連中は彼にもゲームに入らないかと誘ったことだろう。だが、ジョージの特技は頭を使って金を儲けることであり、ニューヨークではその手で何度も成功していたので――ノーフォークでの裁判中にもその数例が明るみにでた――連中は彼を〝紙泥

棒〟と呼び、彼の名声や容姿にも一顧だに与えなかった。ジョージは歯をくいしばった。いずれチャンスがきて連中が手の届く範囲に近づいたら、目にもの見せてくれるのだが。引き締まった、強靭な肉体を有しているおかげで、彼は運動選手のようになめらかで均斉のとれた、バランスのいい動きをすることができた。体は常に頑健だったし、十代の頃には街頭での喧嘩の名手として鳴らしたものだった。その後、人生行路はさまざまの曲折を描いたが、自らの肉体を常に最高の状態に保つ心がけだけは、一度たりとも失ったことがなかった。こみあげてくる怒りをぐっと押えて、ジョージは低く悪態をついた。まさにその瞬間、四—四—〇型機関車の巨大な前輪は、彼の待ちかまえていた急坂の起点にさしかかった。計算より一時間遅れていたが、その遅れにはむしろ感謝したい思いだった。おかげで、この肝心なときに、あの警戒心の強いペンダーが席を離れているというめぐり合わせになったのである。ジョージの運は変わりつつあった。

「どうしたんだ、こりゃ？」汽車のスピードがガクンと落ちたのに気づいて、ジェイクが大声をあげた。それを聞いたルークが、顔色も変えずに、彼の不安を解いてやった。

「この坂のてっぺんで、いつもポイントを切り替えるんだ。ここからあと一マイルよ。停まるのは一分ぐらいのもんだがな——そこからあとは、カンバーランドに一直線よ。明日の朝には着くだろう」

「カンバーランドってえと、おれたちが馬を乗り捨てたところか？」

「そうだ」ジェイクは自分のカードを見て、にんまりと笑った。「さあ、おまえの手を見せてみな」

ペンダーが、ちらっと背後をかえりみた。汽車が急にスピードを落としたショックで、最後尾から三輛目の客車の乗客たちの眠気は、一瞬吹っ飛んだようだった。じっとしているジョージを見て、いい子だと賞めるようにうなずくと、ペンダーはまたテーブルに向き直ってポーカーをつづけた。窓外の凍てつくような夜気を衝いて、風が唸り、雪が舞った。それまで一定のリズムで響いていた走行音が一段とかん高くなったと思うと、巨大な蒸気機関車は喘ぎ喘ぎ坂をのぼりはじめた。ジョージは心中に祈りの言葉を唱えてから押し上げ式の窓にもたれかかった。

最下段のプッシュ式の掛け金が静かに外れた。わずかにあいた隙間から冷気が流れこんできて肩を撫でる。ジョージは、ポーカーに熱中している男たちからそっと視線をそらして、もう一度窓枠に体の重みをかけてみた。いまの仕

草を隠すのだけでも容易ではなかったが、窓をあけるにはもう一つ掛け金を外さなくてはなるまい。

そちらに体の圧力をかけるべく、そっと位置を変える——そのときだった、地から湧いたように一人の少女が眼前に現われたのは。無言のまま興味しんしんたる面持ちでジョージをながめていた少女は、ちょこんと向かい側の席に腰を下ろした。

ジョージは微動もせずに坐っていた。自由を保証する冷たい空気が肩口から忍びこみ、ぞくっとする冷気が刑務所支給のブーツの底にまで這い降りてくる。少女は射すくめるようにこちらを見つめている。ジョージはその視線を受けとめて、相手のドレスや顔をじっと見返した。少女は窓の掛け金を見やり、ジョージの目をもう一度のぞきこんでから、にっと微笑した。彼女の背後のテーブルでは息づまる沈黙のうちに二度目のゲームの大詰めが近づいているらしく、四人の男たちはすっかり熱くなって、財布が許す以上の金額を賭けているようだった。ジョージは少女の視線をとらえて、そっと微笑を送ってみた。が、相手はさっきとはうって変わって、そっけない表情を浮かべる。こちらが少しでも妙な真似をすれば、少女は大声で叫んで、車内中の注意をひこうとするにちがいない。

時速四十マイルで走る汽車から飛び降りたら、怪我は必至だ。くるぶしでも折ろうものなら、それでもう一巻の終わりである。だから、是が非でも汽車が登坂中に行動を起こさなければ。飛び降りるのはいまだった。スピードは時速三十マイルに落ちている。ポーカー・テーブルの四人は勝負に夢中だった。ジョージはちらっと窓を見てから、少女の顔に視線を走らせた。坂をのぼりきるまで、あと一分もない。やってみるしかなかった。

素早く二番目の掛け金を外して、元の姿勢にもどる。ひんやりとした夜気が、窓の下全体から流れこんできた。少女は魅せられたように、外れた掛け金を見つめていた。次の瞬間、ゆっくりとジョージの膝の上に視線を移し、手錠に目を凝らす。きっと、本物の手錠を目にするのは初めてなのだろう。そのとき、またしても汽車のスピードがガクンと落ちるのをジョージは感じた。ポーカー・テーブルのほうで歓声が湧いた。最後のカードが配られたのだ。ペンダーがうんざりしたようにふり返って、少女の姿に気づいた。

「おい、嬢ちゃん——だめだよ、そこに坐っちゃ」

ペンダーが腰を浮かしかけたとき、少女はふり返って訊いた。

「この人、銀行強盗なの？」
ジョージはきりきりと歯をくいしばった。
「いいから――さっさとそこをどかねえか」
ジェイクとルークがくっくっと笑い、イライシャがペンダーの腹を小突いた。
「ご婦人に向かってなんて口をきくんでえ、保安官。ここは豚小屋じゃねえんですぜ、なあ、みんな」
少女はペンダーの荒っぽい言葉など気にもかけずに、検事のように二番目の問いを放った。
「あなたは保安官？」
助手たちの喉まで出かかっている揶揄を押えこもうと、ペンダーは素早く言った。
「ああ、そうとも――さあ、さっさとあっちにもどりな」
彼が客車の後部を指さしたとき、汽車はまたしてもガクンと揺れた。少女は慌てる風もなく、涼しい顔で言った。
「あのねえ保安官さん、この銀行強盗、逃げようとしてるわよ」
ペンダーは、助手たちの笑い声を無視した。
「なんでわかるんだね、嬢ちゃん？」
言葉は歴史に影響を与え、行為が歴史をつくる。次の瞬間、オハイオの原野をひた走る列車の最後尾から三輛目の客車の乗客たちは、その両方の実例を目撃したのだった。
「だって、この人、窓をあけちゃったんですもの」
すました顔で言うと、少女はジョージのほうに向き直って、にこっと笑った。
罵りの声をあげつつ、ジョージは渾身の力をふりしぼって窓をこじあけた。少女は慌てて母親のほうに三歩駆けよった。こうなっては、彼女の喉まで出かかっている悲鳴が、いつ車内を貫かぬでもない。ジョージは半ば押し砕くようにして、窓をあけることに成功した。そのとき、巨漢に似合わぬ俊敏さで、ペンダーが通路を突進してきた。手にしたショットガンの安全装置を懸命に外そうとするのだが、外套の毛皮にひっかかって外れない。それではとばかり、彼は銃をふりかぶって大声でわめきながらジョージの頭にふり下ろした。ジョージはさっと身をかわしざま、ペンダーの股間を思いきり蹴りあげた。苦痛に顔を歪めてひざまずく保安官。わななく口元から苦悶の呻き声が洩れはじめた。すかさずジョージは、手錠でつながれたままの両の拳をふり下ろす。保安官の頭は大きく左右に揺れた。歯が砕け、血飛沫が車内に飛んだ。顔の骨に満身の力でふり下ろされる硬い手錠――これほど効果的な打撃もあるまい。
間髪を容れず、第一撃に劣らぬ痛撃をくらったペンダー

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c